

SROLANH NEWS



発行：NPO 法人スロラニユプロジェクト
 〒655-0049
 兵庫県神戸市垂水区狩口台 4 丁目 31-505
 TEL：090-9982-4032
 Email：srolanhproject@gmail.com

カンボジアの障がいのある子どもたちの「生きる」を支援する。

チョムリアップスオ！～ごあいさつ～ NPO 法人スロラニユプロジェクト代表 飯塚 由美子

世界中で新型コロナウイルス感染が広まっている中、人々の生活に大きな影響が出ています。当プロジェクトにおきましても、2月の活動及びその後に影響が出ていることは否めません。しかしながら、2月には無事に現地での定例活動を実施することが出来、メンバー全員も健康上全く影響もなく現在に至っていることは、大変ありがたいことであったと感謝しています。

少し前、アジア人への差別的発言などがマスコミで取り上げられていましたが、飛行機内やシェムリアップ市内には、当時、韓国の方と中国の方は出国制限があった為か、全くいの方でした。機内でもヨーロッパの方の友好的な対応に対して、報道の怖さと人の優しさを痛感した渡航でした。

前回から、職員研修として同行していただいている日本福祉協議機構の皆様と、今回初めて参加して頂いた「夜明け前 呉秀三と無名の精神障害者の100年」の今井友樹監督の新たな視点や、新たな村の障害児との出会いが、私自身の活動の原点に立ち戻れた素晴らしい機会となりました。



日本福祉協議機構の皆様と今井監督 (ワットボー小学校)



ソンボフ君に話しかける飯塚代表

スロラニユプロジェクト支援活動に参加して ドキュメンタリー映画監督 今井 友樹氏



今井監督と愛弟子の植村君

「母と涙の二二分」さながらの世界がカンボジアにはある。」本プロジェクトに参加したのは飯塚代表のこの一言がきっかけでした。私は今回、障害児支援の現場でその光景を目の当たりにしました。飯塚さんを含めたメンバー3人が、知的障害の子どもがいるとの情報を得て、その子のお宅へ行くというので私も同行させていただきました。世界遺産アンコールワットのすぐ脇にある粗末なお宅(おそらく観光客は誰一人として気づかないであろう)で、ピチェット君(8歳)は祖父母に育てられていました。祖母から家族構成や生活状況をヒアリングしながら、飯塚さんが彼の体をマッサージしている時でした。それまで我々の話を黙って

聞いていた祖父が、じっと飯塚さんの顔を見つめているのです。「私たち(の活動)は見られている！」そう思うと同時に、私の目にはおじいさんが飯塚さんを信頼しているかに映りました。

一見貧しい生活に思えても、ピチェット君は祖父母の愛情を受けて育てている。彼らは自分より豊かな生き方をしているのではないかも知る体験でした。また今回の訪問で、カンボジアの人びとにとっての支援とは何かを考え続ける代表たちの苦悩も知ることができました。「母と涙の二二分」の意味を少しだけ理解することができました。



ピチェット君(中央)とご家族

障害児を育てるお母様への美容サービス サキナマネジャー 宇都宮 寿子

今回で4回目のボランティア参加でした。私は専門は美容サービスですがその他にも歯科部の補助、救急救命講習の補助でお手伝いさせていただきました。

専門の美容サービスについて、前回初めて孤児院でのデイサービスに来られる障害児のお母様達にメイクアップをさせていただきました。とても喜んで頂けたのか、今回メイクの準備中からいち早く並ばれて待たれるお母様、お姉さんもいらして、ヘアスタイル、アクセサリーでの変身のところは元教師の須藤先生、看護師を目指すカンボジア初渡航の三村りりなさんがお手伝いしてくださり、喜んで頂けたと思います。

綺麗になりたいというのは世界共通ですね。このことが明日からのお子さんの子育てのエネルギーになってくれると嬉しいです。



お母様へ美容サービスを行う寿子さん(左)

スロラニユ歯科部現地活動報告①(2019.7.19～23) 歯科医師 大森 茂樹

歯科部として13回目の現地活動に参加した。歯科医師2名、歯科衛生士1名、ビューティパートナー1名が主なメンバーとして活動した。適宜他部門のメンバーに力を借りて歯科保健啓発活動を行った。歯科部としての活動概要は次の通り。

小学生対象の歯科保健指導

スロラニユ小学校児童 約70人/師範学校附属小学校1年生 約100人

中・高生対象の歯科保健指導

ドントロー中学1年生徒 約50人/アンコール中・高校生徒 約100人

学生に対する歯科保健指導

師範学校学生(1年次) 約50人

障がい児口腔ケア

デイ・サービス等にて6人

村での歯科啓発(ハブラシ配布)

3カ所

今回は活動場所ごとに主任を決め、主任が内容を自由に決めるスタイルで活動した。

スロラニユ小学校と障がい児口腔ケアは杉本歯科衛生士、ドントロー中とアンコール中高は宇都宮歯科医師、師範学校は大森歯科医師が担当した。



スロラニユ小学校での歯磨き啓発

スロラニユ小学校では幼稚部、1・2年生、4年生の3クラスでそれぞれの年齢に応じたブラッシング指導を杉本歯科衛生士が主任となり実施した。幼稚部では歯垢染色は行わず、パペットなどを用いてお話を。1・2年生と4年生は歯の講話に続いて歯垢染色を施したうえで全員にハブラシを配付し、ブラッシング指導を行った。その際、手鏡を貸し、観察を促した。前回口の中を観察した時の印象よりも状況は悪化しているように感じたが、それはあくまでもわたしの主観に過ぎない。

ドントロー中学では実習は行わず、宇都宮歯科医師による講話のみであった。むし歯はなぜできてしまうのか、を科学的に理解してもらう内容だった。救急救命講習のあとだったので、約30分の講話であった。最後に全員にハブラシを配付した。

デイ・サービスではロンタくん(パペット)による啓発は行わず、障がい児に対する口腔ケアのみを丁寧に実施した。成長に伴い、ブラッシングに対する意欲向上が認められ、これまで拒否が強かった幼児が母(姉)の仕上げみがきに素直に応じている姿があった。交換期にうまく乳歯が脱落していないケースがあり、課題として残った。デイ・サービスに参加されない障がい児は個別に訪問し、村では集まった子どもたちに対しロンタくんも用いて啓発活動を実施した(3カ所)。

師範学校では1年時の学生とともに低学年児に対するブラッシング実習を大森が主任を担当し実施した。まずブラッシング方法について説明し、生えかわりについて図示したプリントを利用し、生えかわったばかりの永久歯はむし歯になりやすいこと、そして隣にいる児童にはすでに第一大臼歯が萌出していることを伝えてから、歯垢染色を行った。児童へのアドバイスは主に学生から声をかけてもらった。

児童が教室に帰ってから、学生たちに感想を尋ねると、教師になったら歯の健康についても話したい、と語ってくれた。師範学校での活動の集大成となる指導ができたのではないかと自負している。なぜなら、今までで一番よいアクションだと感じたから。受講生が渡したパペットなどを用いて歯科保健指導をしてくれる日を待ち望む。

最終日にブラッシング指導を実施したアンコール中学・高校は4階にある大教室が会場で、椅子の移動から始まり、床の掃き掃除をする必要があった。開始予定時刻になってもなかなか人が集まらない。時間に対してこれほどルーズだというのは驚きだった。しかも、後方の席についた生徒たちはスマホでゲームをしていたり、SNSを楽しんだりしていて、講義に参加していなかった。人数が多すぎたのも問題だった。ここでも歯垢染色は行わず、人数の把握も難しかったのでハブラシのプレゼントは見送ることにした。アンコール中学・高校での活動については今後の見直しが必要だと思われた。

歯科部は今回も「未来の子どもの歯を守るためにできることを」を活動テーマに掲げて臨んだ。できることをできる人ができる範囲で、みなさんに歯科の支援をバックアップしてもらいながら実施した。

将来教師になる学生や、将来親になってゆく中学生には、「子どもの歯を守って下さい」と伝え続けることが大切だと考えている。今回は場所により主任を変えた。自由にするこでのびのびしてくれればよい。自分でプランニングして媒体を作成し、内容を計画するのはたいへんだけれどやりがいがある。苦勞するほどやり終えた時の達成感は大い。また一段ステップアップができた。歯科部は次のステージに向かう。



歯磨き支援を行う大森先生



師範学校歯科支援活動

スロラニユ歯科部支援現地活動報告② 歯科衛生士 杉本 葉子

スロラニユ小学校での歯磨き啓発活動は各学年それぞれの話に合う媒体を考え、言葉はグーグル翻訳を使い、簡単な単語程度のクメール語で表記しました。話を長くしても飽きてくるし、説明は通訳を介しての話だと理解しているかどうかはわからないので、絵でわかるような媒体にしました。時間がどれくらいあるのかわからなかったので、ロンタ君で時間調整をしたので、毎回話が違ってしまいました。

子ども達の口腔内を見ると、6歳臼歯が虫歯になっている子供がたくさんいました。乳歯は虫歯がかなり進行していて、根だけが残っているという状態の子供がたくさんいました。継続していくことで、子供たちに歯磨きの大切さをわかってもらえたらいいなと感じました。また甘いお菓子の摂取の仕方も課題になってくると思います。



ロンタ君を持つ杉本さん

師範学校は、学生のやる気を感じられたし、子供たちもロンタ君の歯磨きにも積極的に参加してくれて、私も楽しくできました。こちらが、わかってもらいたいと必死に訴えたら、相手にも少しは伝わったかなと思います。大森先生が将来教師になる学生にしっかりわかってもらいたいとおっしゃっていたので、学生が子供の口の中を見て、歯磨きをしてもらうように、ジェスチャーで訴えました。

デイサービスでの歯磨きは時間をかけることができ、みんなの歯磨きができたことはいけなかったです。回数を重ねてきたからなのか、みんなが慣れてきてくれて、上手にさせてもらえました。お母さんたちが普段がんばってしてもらえているのが、子供たちを見てるとよくわかります。「継続は力なり」です。



障害児歯磨き支援

スロラニユ歯科部支援現地活動報告③ 歯科医師 宇都宮 淳

今回の私の担当が活動初日 22 日 (土) 午後からのドントロー中学校 (2 年) と最終日 25 日 (火) 午後からのアンコール中学校 (2 年、3 年) となった。

まずドントロー中学校 53 名に虫歯の発生メカニズム、それに対する予防についてパネルを使いクイズ形式で挙手させながら進めていった。全員床に座った状態で集中して聞いてくれたと思う。ただ、話の内容で中性、酸性を理解できず戸惑ったところはあったが楽しく終わった。最後に全員に歯ブラシを配り、また発言してくれた生徒にはディスプレイのデンタルミラーを 1 本ずつプレゼントした。

次は最終日アンコール中学校を訪問した。中学、高校一貫校で大変大きな学校だった。

4 階の大きな教室で中学生、高校生が約 100 名集まり救急救命講習の後虫歯についての話をした。高校生も参加とありドントロー中学より少しバージョンアップしたパネルを加え、話をした。やはり、中性、酸性は理解しにくい感じだった。

大人数で机に座っての講話だったので後ろの席の生徒は雑談、遊んでいたようであった、仕方ないか。やはり 50 人前後の生徒数が適当と思われる。

今回カンボジアに到着して間もなく大森先生から今回の活動参加するにあたり家族、職場スタッフと話し合いを行った結果、今回をもって参加を打ち切ると聞き私が引き継ぐこととなった。大森先生が築いてこられたベースを壊すことなく口腔衛生啓発活動を続けていきたいと思っている。ただ、自営業という事もあり、年 1 回 7 月のみ参加できればと考えている。今回もいい経験ができたので今後に活かして行きたい。



ドントロー中学校歯科支援活動

2020 年 2 月救急救命講習活動報告 救急救命士 高橋 茂樹

救命講習は 2013 年 7 月 13 日にコムルー村の村人に指導してから 2020 年 2 月活動まで紆余曲折を経て延べ 34 回、計 1,343 人への講習を行ってきた。

お陰様で、孤児院では年長者のオウダム君が指導員となるまで成長し、また、アプサラ機構では、職員が業務中に観光客に対し応急処置を施したり、さらには今回、副 CEO から、熱い言葉と感謝の言葉をいただき、労をねぎらってもらった。この救命講習に対しての上層部の意識の高さを感じた活動でもあった。

今後は上記の救命講習活動年数や実績を検証し、今後の救命講習のあり方について検討し、すべきかと思われる。例えば、生徒達への救命講習についてであるが、日本では教育の一環として、心肺蘇生などの教育があり、わたしは同じようにカンボジアの生徒達に指導しなくてはと考えていたが、やはりカンボジアの現状を考えると、師範学校の生徒や大きな団体職員、そして何よりも教育者に指導し、この講習の重要性を認識してもらうことこそが今必要か考える。その後、生徒達に講習を実施する方が、意識・心構え・重要性もよく伝わるのではないかと考える。まだまだ時間はかかりそうですが。

以上、年々高齢化するメンバー (高橋含む) の負担も考えた場合、アプサラ機構・師範学校の学生と教諭・孤児院に縮小するのもいいかなと考える。



オウダム君と高橋隊長 (中央)

やさしい授業活動報告 元教諭 須藤 徳子

活動初日のスロラニユ小学校での運動会の後、3、4 年生と 1 年生に算数の授業をさせていただいた。

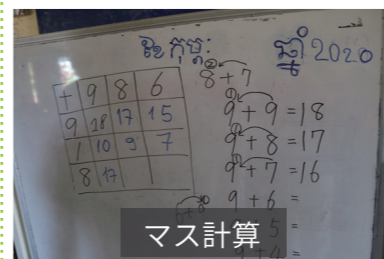
まず、最初は 3、4 年生複式学級の授業。この子供たちは、1 年生の時から 10 の合成分解 (10 は 1 と 9、2 と 8...) をしっかり覚えて暗算が出来るように何回か授業をしてきたので、今回はマス計算のやり方を担任の先生に提示して、短時間に沢山の計算練習が出来ることを伝えたかった。

復習として、10 のブロックを使って合成分解をした後、プリントを配って自分で書くようにしたが、ここでつまづく子がチラホラ。プリントを使って学習することに慣れていないので、書き方の見本を示しても、どこに何を書けばいいのか分からない子供が多かった。

担任はじめメンバーの助けを借りて、全員何とかクリアしたので、次にマス計算のやり方を示した。9 マス、12 マス、27 マスの足し算、2 マス × 9 マスのかけ算を書いたプリントを配ってスタート。4 年生でもなかなか時間がかかった。子供たちが計算をしている間、担任に



合成分解を教える須藤先生



マス計算

マス計算のメリット等を伝えた。日本の 1 年生が、100 マス計算を 3 分前後で出来るようになるのは学校や家庭で繰り返し計算カード等で練習しているからだと思った。

次の 1 年生は、20 分ほどしか時間が無かったが、「いくつといくつ」をおはじきを使って行った。初めは、5 個のおはじきをホワイトボードに貼り、数を数え 1 個だけ残して袋に入れる。「さあ、この袋の中におはじきはいくつ入っているのでしょうか?」というと、みんな一斉に「4!」と答える。「じゃあ、確かめてみましょう。だれか、出て来て袋の中のおはじきを出して下さい」

手を挙げてくれた子が前に来て、袋の中のおはじきを数えながらボードに貼っていく。「本当に 4 だったね。じゃあ、これは?」ボードに 2 個のおはじきを残す。初めは恥ずかしがって前になかった子供たちも、やり方が分かってきてどんどん手を挙げて前に出て来てくれた。

この繰り返しで、5 の合成分解を終え、次に 10 個のおはじきを使って同じように行った。20 分という短い時間だったが、みんなとても集中して楽しく学習することが出来た。

このようにして、楽しく 10 の合成分解を 1 年生の時から繰り返すことで、計算も早く出来るようになることを担任に伝えた。カンボジアでは、何より難しいクメール語の学習を優先しながらの授業なので、算数の学習は短時間で効率よくできる方法をこれからも伝えていけたらと思う。

現地での障害児支援報告 NPO 法人スロラニユプロジェクト代表 飯塚 由美子



相談支援を行う飯塚代表

今回は、障害児支援メンバーのモンテッソーリアンの浅原さんと作業療法士の山本さんが不参加となったことで今回は、2 年前まで、私が中心となり子ども達に直接対応をしていたプログラムになりました。

1 日目のスロラニユ小学校での「幼稚部支援」では、福祉機構の放課後デイサービスをさせている女性たちが活躍してくださり、お絵かきを実施しました。2 日目の障害児デイサービスでも、同じ福祉機構の職員の方と、新たな参加者、ソーシャルサポートセンターひょうご代表理事の青木さんに活躍していただきました。もちろんお母様の相談支援はいつも通り私がお話を聞かせて頂きました。皆さんそれなりに生活でのお困りごとはなかったことに胸をなでおろしました。

さて、今回の大きなミッションは、ワットボー小学校の障害児支援 (特別支援教育の導入) の一環である、ワットボー小学校教師の日本派遣について、キムチェン校長の理解を得られるかでした。費用面の心配がないこと、教師の皆さんの熱心さ、何よりキムチェン校長自身が障害児への特別支援教育に重要性を痛感していただいていることから、快く承諾していただきました。まずまずスタートは順調です。今後は日本福祉協議機構・濱野代表の資金面、プロジェクトの大枠などの進展に期待するところです。



キムチェン校長との話し合い



ビジョントレーニング指導

また、ワットボー小学校では、「ビジョントレーニング」を各学年 1 クラスずつ実際に取り組んでいただくことが今回の狙いでした。今井監督や大学生の植村君、福祉機構の職員の方にお手伝いして頂き何とか子ども達に実際試していただきました。道具をお渡しして、少しでも取り組んでいただくようお願いしました。

そして、現地在住のキャンディーアンコール代表の西さんから情報を頂いた、村の新たな障がい児宅訪問は、本当に発見の多い活動になりました。

アンコールワット遺跡近くの村に住む、2 名の男児を訪問しました。1 名は肢体と知的に障害があるピチュット君です。祖父母に育てられた彼には、コミュニケーションと体が硬くならないような手だてが必要であり、貧困という状況から栄養食の支援も必要であると思います。

もう 1 名のソペア君は、車いすを利用している脳性麻痺の知的にはさほど低くないと思われました。彼は以前海外の団体が支援している学校に通っていましたが、何らかの事情で廃校になり勉学の継続が出来なくなりました。彼は学校に通い勉強することを非常に望んでいました。まず、どれくらいの能力かを簡単な計算を試してもらい確認し、すぐにシムリアップの町に戻り、計算ドリルや簡単な文字の学習帳を購入し、再度彼の元に戻り手渡しました。彼の本当に嬉しそうな笑顔が印象的であり、障害があっても教育を受ける権利を改めて確認し、我々の活動の奥深さとまだまだ支援の幅広い必要性を痛感した出会いでした。障害のある子どもたちの支援を開始し約 8 年になりますが、小さな団体が可能な範囲として個別に必要な支援をできる範囲で実施してきました。一方でワットボー小学校での特別支援教育の新たな開始があり、一方で村の重度の障害児に対する支援の個別性の課題。

スロラニユプロジェクトとして、「目の前に支援を必要としている方に何らかの形で必要な支援を実施する」という信念を再度確認した、今回の現地訪問は、原点に戻る大切な機会となりました。次の 7 月の渡航では、作業療法士の同行、教材の準備、座位が取れる補助具準備など、今から準備を余念なく行い、次回訪問が楽しみです。

そして、ピチュット君の家にいた小学校 5 年生の女兒は両親に捨てられ、ピチュット君の祖父母に育てられていました。同年齢の本当の孫である女兒と何ら変わりなく育てられている状況を目の当たりにして、そして障がいのあるピチュット君を家族が見守っている姿に、「共生社会」の本来の姿を見た思いがしました。そして支援する側される側、全く関係なく、心地良い思いをさせて頂いた出会いに感謝し、次回訪問を心待ちにしている私です。



新規障害児 (ピチュット君)



新規障害児 (ソペア君)